

館蔵品展「高岡ゆかりの屏風」出品目録

〔会期:2020年11月21日(土)~2021年1月11日(月・祝)〕

当館では、日ごろから高岡に関わる歴史・民俗・伝統産業等に関わるさまざまな資料を収集し、適切に保存・管理、調査・整理、展示・公開しています。

本展は、江戸後期から明治期にかけて制作された日本画・書など、当館が収蔵する高岡ゆかりの屏風に焦点をあてたものです。文化的、経済的に興隆したこの時代、日本を代表する文人墨客らが全国を遊歴しました。彼らは高岡の文化人たちとも盛んに交流し、優れた日本画や、漢詩書など多くの資料が今に残されました。

本展では、高岡初の町絵師・堀川敬周が描く《牡丹に孔雀図屏風》等2件の新発見資料をはじめ、未公開資料を含めた当館収蔵の高岡ゆかりの屏風を展示し、各々の屏風がもつ高岡の歴史や、ゆかりの人々について紹介します。

最後に、本展開催にあたり貴重な資料を快くご寄贈賜りました、関係各位に厚く感謝申し上げます。

| No. | 資料名称 | 年代 | 点数 | 本紙寸法 (縦×横, cm) | 内容 | 所蔵 (寄贈者) |
|-----|---------------------------------------|-----------------------------------|-------------|-------------------|---|-------------|
| 1 | 画・寺島蔵人(応養)、詩・中島棕隠《山水六景詩画屏風》 | 画・江戸後期 詩・弘化2年 (1845) | 2 (6曲1双) | 各119.0× 45.0 | 高岡町奉行で画人の寺島蔵人が描いた山水図に、京都出身の漢詩人・中島棕隠が読んだ漢詩を交互に表具し、屏風にしたもの。蔵人の画は、越中砺波郡福光(現南波市)の素封家・石崎無莫(善右衛門)が所有していた。弘化2年(1845)、棕隠が石崎家に滞在した際に無莫の依頼で棕隠が詠んだ七言律詩(七絶)十首と跋文(左隻第六扇)が表装されている。絹本着色・墨書 | 当館 |
| | てらしまくらんど 寺島蔵人 | 生没年:安永5 年(1776)~天保 8年(1837) | | | 加賀藩士、画人。原元成の三男。名を兢、字は季業、号は応養など。1801年に寺島家の養子となり、禄高450石を相続し、高岡町奉行、定検地奉行、改作奉行など農政や財政の実務を担った。度々藩政を批判し、能登島に流刑となり病死した。蔵人は1803~06年、高岡町奉行となる。1804年、同職の祖父が果たせなかった時鐘を铸造した。この時鐘は二番町の町会所で撞かれていたが、割れ目が生じたため、坂下町の鍋屋仁左衛門が私財を投じて1806年に改铸した(現大仏寺蔵・高岡市指定文化財)。蔵人は仕事に励む一方で画にも親しみ、山水図、竹石図、花鳥図などを描いた。また文人画家・浦上玉堂など文化人との交流もあった | |
| | なかじまそういん 中島棕隠 | 生没年:安永8 年(1779)~安政 2年(1855) | | | 江戸後期の漢詩人、儒者。名は規、字は景寛、士成。通称は文吉、号は棕隠、棕軒など。京都で代々儒者の家に生まれ、伴蒿蹊に国学を、村瀬栲亭に儒学を学んだ。詩・和歌・俳句のほか狂歌・狂詩・小説も書くなど、粹人としても知られた。文政・天保期(1818~44)の京都において、頼山陽と並ぶほどの詩名があった。著書に京都・祇園の繁華を詠じた詩集『鴨東四時雑詞』(1826年)、『棕隠軒集』(初~4集)のほか狂詩集なども出版した。越中へも何度も訪れ、高岡へは大窪詩仏に次いで訪れているという。晩年は、幕末の不穏な政情を睨みつつ、客を招いて手づから料理を振る舞い、書画に健筆を揮い、自邸の庭を耕しながら、弟子に経書を教えたという | |
| 2 | 画・堀川敬周、 賛・桜井梅室《人 物十二ヶ月の図屏 風》 | 天保4年(1833) | 2 (6曲1双) | 各130.5× 42.0 | 敬周と親交のあった金沢出身の俳人・桜井梅室(1769~1852)が各扇二句ずつ賛を記したもの。一年の年中行事に触れ、右隻の正月から6月までの風物詩に始まり、左隻には7月から師走までの人物の風俗を洒脱な筆致で描く。各扇それぞれに、敬周と梅室両者の落款があり、印章がある。紙本彩色・墨書 | 当館 |

| | | | | | | |
|---|-------------------|----------------------------|--|-----------------|--|---------------|
| 3 | 堀川敬周筆《老松に雀図屏風》 | 天保13年(1842)8月 | 1 (6曲1隻) | 121.2× 300.0 | 新発見資料。屏風全面に老松が右方向に枝を広げ、その枝の下に一羽の雀がおり、左下の地面に留まるもう一羽の雀を見る。松の根元には芙蓉や秋海棠、大蓼などの花が咲き、画面に華やかさをもたらしている。背景には金箔片が散らされ、霞がかかったような空気感が表現されている。落款は第六扇左下に「壬寅秋八月写／敬周」、印章は朱文方印「公載氏」と白文方印「長汀」がある。敬周の代表作ともいえる作品の一つ。紙本彩色 | 当館 |
| 4 | 堀川敬周筆《牡丹に孔雀図屏風》 | 江戸後期 | 1 (6曲1隻) | 153.3× 347.4 | 新発見資料。屏風全体に長い羽根を畳んだオスの孔雀が悠然と佇む様子が描かれる。羽毛の一本一本や大きな紅白の牡丹なども細密に表現される。また孔雀の美しい飾り羽(上尾筒)の目玉模様(眼状紋)には金箔が押され、また要所には金箔片が散らされ、上品かつ厳粛な雰囲気を醸し出している。落款は第一扇右下に「敬周写」、印章は白文方方印「公載」がある。敬周の代表作ともいえる作品の一つ。紙本著色 | 当館 (片岸昭二氏) |
| | ほりかわけいしゅう 堀川敬周 | 生没年：寛政元年(1789)頃～安政5年(1858) | 江戸後期に商工活動が盛んになった高岡に現れた最初の専門町絵師。天保・弘化年間(1830～48)を中心に活躍し、初期高岡画壇の礎を築いた。姓は「源」、字(もしくは氏)が「公載」といい、「長汀」とも称した。『高岡史料』下巻(1909年、高岡市)によると、高岡堀上町の紺屋・湊屋平助の二男に生まれ、片原中島町の画人・堀蟻翁の養子となった。その後画業を志し、京都四条派の紀広成、東洋に学び、山水・花鳥・人物などあらゆる画題を修得した。一方で漢詩人・大窪詩仏、金沢の俳人・桜井梅室、瑞龍寺の閑雲禅師ら多くの文人墨客たちと親交をもち、洒落な俳画や風俗画も描いた、また高田蕙圃など多数の弟子を育成した | | | |
| | さくらばいしつ 桜井梅室 | 生没年：明和6年(1769)～嘉永5年(1852) | 江戸後期の俳人。加賀(現石川県)金沢出身。名(諱)は能充、幼名は次郎作、初号は雪雄、別号は素芯(信)・方円斎・陸々山人など。研刀で代々加賀藩主に仕えた家に生まれるが、文化4年(1807)、39歳の時に俳諧師になるため辞職。上洛して上田馬来に俳諧を学び、成田蒼虬に兄事した。後に江戸に居住。一時金沢に引っ越すも、再び上洛した。帰郷後は俳名いよいよ高まり、その門に学ぶ者が多くいた。嘉永4年(1851)には、二条家から7世・花の本宗匠の称号を与えられ、成田蒼虬、田川鳳朗と共に「天保の三大家(宗匠)」の一人に数えられた。主な編著に、『梅室両吟集』(1838年)、『梅室家集』(1839年)などがある。梅室没後は、一代の年譜『梅室翁紀年録』(1854年)も出版されるなど、大きな足跡を残した | | | |
| 5 | 佐伯春芳筆《山水図屏風》 | 江戸後～明治中期 | 2 (6曲1双) | 141.2× 325.8 | 左隻には山々や樹木が描かれ、山間で暮らす人々の様子を描く。右隻には、画面奥に海(もしくは湖)が広がり、水辺に暮らす人々の様子が描かれる。左隻の第六扇と右隻の第一扇には落款「春芳」、印章は朱文方印「春芳」とある。紙本彩色 | 当館 (古谷昭史氏) |
| | さえきしゅんぼう 佐伯春芳 | 生没年：嘉永元年(1848)～明治34年(1901) | 高岡出身の日本画家。重願寺(高岡市大町)住職・法酬の実弟で、名は芳林、号は春芳。幼少期から絵を描くのが好きで、13歳の頃に中川菱香の門下に入った。非常に勉強熱心で、明治6年(1873)京都の塩川文麟に師事し、特に花鳥山水を得意とした。また各地の共進会等にも出品して入賞を重ね、門下生も多くいた。高岡の銅器・漆器及び染色図案の進歩に大きな役割を果たした | | | |

| | | | | | | |
|---|----------------------------|---------------------------|--|-------------|--|---------------------|
| 6 | 広瀬旭莊筆《五絶》 | 江戸後期 | 6 | 各134.6×52.4 | 豊後国（現大分県）の漢詩人・広瀬旭莊の漢詩（五言絶句）。元は六曲一双の屏風。12幅あるうちの6幅で、全幅共通で本紙左下に落款「旭莊」とあり、白文方印「広瀬／謙印」と朱文方印「梅墩」と印章がある。紙本墨書 | 当館 (山田達雄氏・早苗裕子氏) |
| | ひろせきよくそう 広瀬旭莊 | 生没年：文化4年(1807)～文久3年(1863) | 豊後国日田（現大分県）出身の漢詩人、儒学者。名は謙、字は吉甫、通称は謙吉、号に秋村、旭莊など。兄・淡窓の末弟。一時、子のない淡窓の養子となり、私塾・咸宜園を経営するも、1836年に日田を離れ、泉州（大阪府）堺に塾を開いた。後に大坂・江戸・北陸を巡遊、各地の名士と詩文の交友を結んだ。1860年来越した際に詠んだ七言絶句「越中囑目」は、今も愛誦されている名吟である。中でも詩作を得意とし、「東国詩人の冠」と称えられた。津島北溪『高岡詩話』（1860年）には、旭莊が高岡の文人たち（津島北溪・土肥松軒、逸見文九郎など）と盛んに交流したことが記される。また牧野村東弘寺にも滞在し、五十嵐篤好とも交流した | | | |
| 7 | 大窪詩仏筆《五絶》 | 江戸後期 | 1 (6曲1双のうち) | 各129.0×50.4 | 常陸国（現茨城県）の漢詩人・大窪詩仏の漢詩屏風。各扇にそれぞれ五言絶句が書かれ、落款「詩仏」（第一扇）、「天民」（第二～五扇）、「江山翁」（第六扇）と白文方印「大窪／行印」、同「天民／一字／江山」（第三扇のみ、同「詩仏老人一字瘦樸（梅）」）の印章がある。紙本墨書 | 当館 (寺畑喜朔氏) |
| | おおくぼしぶつ 大窪詩仏 | 生没年：明和4年(1767)～天保8年(1837) | 常陸国（現茨城県）出身の漢詩人。名は行、字は天民、通称は柳太郎、号は詩仏、江山翁など。江戸詩壇の両大家・山本北山・市河寛齋に漢詩を学び、寛齋・柏木如亭・菊池五山とともに、「江戸の四詩家」と称された。詩仏は1806年に神田・お玉が池に詩聖堂を営み、平易清新な俳諧に近い詩風で人気を集め、文化・文政期(1804～30)の江戸漢詩壇の中心人物として活躍した。地方への遊歴も盛んに行い、高岡へも何度も訪れ文人らと交流した。詩仏は、詩文のほか、草書、墨竹画もよくした。のちにはお玉が池ほとりに詩社・玉地吟社を開き、多くの後進を育てた。主な著書に『卜居集』、『詩聖堂詩集』、『詩聖堂詩話』などがある | | | |
| 8 | 閑雲筆《七絶》 (左隻) | 江戸後期 | 1 (6曲1双のうち) | 各134.5×52.3 | 能登の総持寺及び高岡瑞龍寺18世住職・閑雲（真巖国常）の漢詩屏風。左隻第六扇の左下に、落款「閑雲書」とあり、各扇左隅の中央部に、白文方印「国常／之印」と朱文方印「真／巖」の印章がある。紙本墨書 | 当館 |
| | かんうん しんがんこくじょう 閑雲（真巖国常） | 生没年：安永7年(1778)～安政6年(1859) | 名は国常、字は真巖、号は閑雲、雪莊（雪庄）、碧蓮道人など。能登鳳至郡今村氏の二男で、幼にして総持寺に得度し、長じて塔中東源寺の住職となったが、後に辞職し、亀田鵬斎の門に入って経書詩文を学んだ。帰国の途中、瑞龍寺第16世の靈源活湛に師事し、首座となった。また京都の大昌寺・了峯寺、摂津の伊勢寺に歴住し、その間に頼山陽・僧大含・篠崎小竹等と交流をもち、その後前田家の要請で瑞龍寺18世住持となった。晩年は谷昌寺（射水市）で詩文と書道を楽しんだが、特に書が巧みで、世に珍重されている。高岡出身の勤王の志士・逸見文九郎は閑雲の書に大きく影響を受けた一人であった | | | |
| 9 | 山岡鉄舟筆《五絶》 (左隻) | 明治12年～14年 (1879～1881) | 1 (6曲1双のうち) | 各138.2×51.2 | 幕末“三舟”の一人で、禅・書に優れた山岡鉄舟が、高岡市西田の臨濟宗国泰寺派大本山・摩頂山国泰寺の窮状を救うため、大量に揮毫・奉納した「国泰寺千双屏風」の一つ。屏風には、中国の唐時代の詩集『寒山詩』（全314首）のうち、128番（第一扇～三扇）と4番（第四～六扇）の詩が書かれる。国泰寺千双屏風のうち。紙本墨書 | 当館 (東 修氏) |

| | | |
|--------------------------|----------------------------|--|
| こくたいじせんそうびょうぶ 国泰寺千双屏風 | 明治12年～14年 (1879～1881) | 山岡鉄舟が明治11年(1878)の北陸行幸に随行した際、国泰寺54世・越叟義格と親しくなり、廃仏毀釈などで窮乏を嘆く越叟のために鉄舟が揮毫・奉納した屏風類である。国泰寺ではその後、越叟や、55世雪門玄松（西田幾多郎・鈴木大拙の師）がこの屏風を売り歩くなどの奔走により、明治26年(1893)までに天皇殿の再建、三門の改築、禅堂の再建など徐々に伽藍の復興を遂げることができた。剣・禅と共に、書にも優れた山岡鉄舟らしい雄渾かつ洒脱な書体で書かれている。この屏風は、優れた美術作品のみならず、高岡市を代表する古刹・国泰寺の歴史を語る上では外すことができない貴重な歴史資料でもある |
| やまおかてっしゅう 山岡鉄舟 | 生没年：天保7年(1836)～明治21年(1888) | 幕末維新期の政治家。名は高歩、通称は鉄太郎。勝海舟・高橋泥舟と共に、幕末‘三舟’の一人。旗本小野朝右衛門と磯の子として江戸に生まれた。剣を北辰一刀流千葉周作に、槍を刃心流山岡静山に学び、山岡家を継ぐ。高橋泥舟の義弟。安政3年(1856)に講武所剣術世話心得、文久2年(1862)に浪士組取締役を拝命。明治元年(1868)、精鋭隊頭となり徳川慶喜の警護に当たる。その直々の命により西郷隆盛を駿府に訪い、勝海舟との会談を周旋し、徳川家救済と江戸開城に力を尽くした。彰義隊にも新政府への恭順を説いたが容れられなかった。維新後は静岡藩権大参事、伊万里県知事などを歴任。同5年侍従となり、同14年には宮内少輔に進む。53歳で病没。東京谷中に自ら創建した禅寺全生庵に眠る。剣客との名があるとおり武骨ではあるが、将軍慶喜・明治天皇のいずれに対しても意気に感じて誠実をもって応えた人である |

※資料保存のため、一部展示替えをすることがあります。

計9件17点